出典

新堀歓乃「宗教と音楽⑦ 花に彩られた能の世界」
『生きる力 SHINGON』
智山教化センター編集、真言宗智山派宗務庁発行、第75号、2013年12月、
20ー21ページ

注：本ホームページでの掲載は著作者より許可を頂いたうえで行っています。さらなる二次利用については、著作権所有者にお問い合わせください。

宗教と音楽 7

花に彩られた能の世界

新堀歓乃
（東京藝術大学音楽研究センター研究推進室特別研究員）

〝能面のような顔〟といいますと、表情の乏しい様子を指すことが多いですが、実際の能の舞台では、この能面が実に豊かな表情を見せてくれます。例えば、能面をほんの少し仰向けたり、うつむけたりしてみますと、このわずかな動きから喜びや悲しみ、恥じらいなど人間の持つ色とりどりの感情が生き生きと立ち現れてくるのです。

能の歴史をたどってみますと、それは猿楽と呼ばれる芸能にさかのぼることができます。猿楽は、曲芸や軽業など現代のサーカスで行われるような雑多な芸能であったようですが、平安時代に書かれた書物を見てみますと、その当時、滑稽な物まねを交えた短いお芝居も猿楽と呼んで楽しんでいたことが分かります。

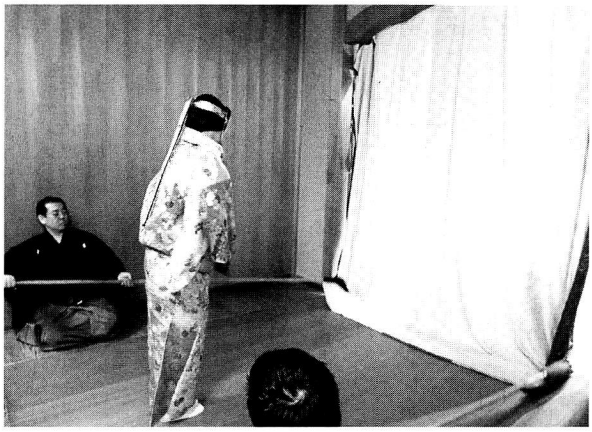
その一方で、猿楽は寺院の大きな法要のなかでも行われるようになりました。たとえば、東大寺のお水取りを思い浮かべていただくと分かりやすいかもしれませんが、国家の安泰を祈るために寺院で行われる大きな行事のなかで、猿楽の芸が演じられるようになりました。世の平安を祈る厳かな儀式の場で演じられた猿楽は、芸能の持つ神秘的な力によって見る人々を魅了したことでしょう。

東京渋谷にある観世能楽堂の舞台。年間を通じて幅広い層を対象とした能楽公演を数多く行っています。（写真協力／観世能楽堂）

そしてさらに時代が進みますと、猿楽は勧進のためにも活躍するようになります。勧進とは、寺院を建て直す時などに募金することを指しますが、その勧進の場で猿楽の芸を披露し、人々からお布施を募るということが盛んに行われていきました。より多くの人を惹きつけようと、猿楽の演者たちも自身の演技に次々と趣向をこらしたようで、活気ある当時の舞台の様子が目に浮かびます。

こうして猿楽は多くの人々に親しまれるようになり、やがて能という洗練された演劇へと姿を変えていきます。室町時代には、あの有名な観阿弥と世阿弥の親子が活躍し、能を大成させました。特に、息子の世阿弥は『風姿花伝』や『花鏡』という能の理論書を残したことでも有名です。これらの書は、能の魅力や感動を〝花〟にたとえて、その花とは何であるのか、どうしたら自身の芸で花を実現できるのかを追究したものですが、世阿弥の残した言葉のなかには、現代の私たちの暮らしにも大切な気づきを与えてくれるものが多くあります。

たとえば、入学式などでよく耳にする〝初心不可忘（しょしんわするべからず）〟も世阿弥が残した言葉のひとつです。今日では、物事を始めた時の新鮮な気持ちや志を忘れてはいけない



鏡の間に控えた演者は、幕があがると能舞台の下手にある橋掛リを通って登場します。演技を終えると、再び橋掛リを通って鏡の間へと戻っていきます。（写真協力／観世能楽堂）

というような意味で使われることが多いですが、これは本来世阿弥がいったことと少し異なります。

世阿弥によれば、初心とは人それぞれの年代に合った芸を学び始めるときの心であり、この初心を一つ乗り越えると、人はまた次に新たな初心に遭遇し、それを乗り越えるために再び稽古を積みます。つまり、毎日が新たな初心との出会いであり、老いてのちもなお、その年齢にふさわしい芸を学ぶ初心があるというのです。

花を追い求めるこうした芸道の精神は、現代に生きる能楽師のなかにも脈々と受け継がれており、その精神に支えられた芸が能の舞台で花ひらきます。

能舞台は、背景に一本の松が描かれただけという大変シンプルなつくりですが、シンプルであるからこそ、そこに演者の豊かな表現が遺憾なく発揮されるのです。舞台の下手にのびる廊下のような橋掛リは、私たちの生きるこの世と異次元の世界を結ぶ架け橋となっています。橋掛リの入り口には大きな幕がかかっていまして、その奥に鏡の間があります。演者は大きな鏡の前で能面をかけると同時に極限まで精神を研ぎ澄まし、そして橋掛リを通って舞台の世界へと入っていくのです。

こうした深い精神に支えられた能の演技に触れますと、舞台に立っている演者の方々が私たちの生きるこの世とは別の世界からやってきた、何か超越した存在であるかのように思われ、身の震えるような感動をおぼえることがあります。芸にこめられた深い精神とそこから生まれる感動の花を求めて、皆さんも能の舞台へ足を運んでみてはいかがでしょうか。

能の謡「高砂」を学生に指導する観世流宗家の観世清和氏。（写真協力／観世能楽堂）